

教 仏 名 聞

第15号

(発行日)

2011年12月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

負けていく道

戦後、鈴木大拙博士が昭和天皇の前で仏教の講義をされたときの講題は「仏教の大意」であった。その内容は、仏教の本質は智慧と慈悲であるとお話しされた。

智慧と慈悲とは何かとなる。と、これまた難しい話になるが、金子大栄先生は分かりやすく「智慧とは我を立てないことである。慈悲とは人(他者)の身になるということである」と説明され、そして智慧と慈悲に基づいて人生活のさまざまな場面において「善処すること、これを方便という」と云われ、智慧と慈悲と方便を身につけていくのが仏教における人生活のあるべきすがただと教えて下さっている。

別に仏教徒でなくても、こうした智慧と慈悲と方便に近い徳を身につけておられる方もあれば、仏教を信じていてもなかなか身に付いていかないう場合もある。これは宿業によるのであろうか。

智慧と慈悲と方便が身に付かなくては助からないというのではもちろんないが、お念仏をいただくとき少しづつなりとも身に付いていくべきはずのものであろう。

私などは重い宿業(宿悪)のためになかなか身に付かない部類だから、いよいよお念仏なくしては生きれないのであるが。

智慧とは我を立てないことであるが、私たちは自我を心に生きているから、実にさまざまに我を立てているのである。一般に「我が強い」とか「我を張る」というようなのがそれである。

たとえば、人から自分の欠点や不始末を指摘されると、すぐに反発したくなる。あるいは弁解をしたくなる。夫婦間でも親戚(しんせき)どうしでも我を張っている。あるいは会議などで、他者が勝れた意見を言うとき、それに対抗したいような気持ちとかあるいは相手の意

《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日(木) 午後二時始

講師 金沢教区・浄秀寺坊守 藤原 千佳子師

*なお、同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

見になんぐせを付けたくなるような気持ちが起こる。

また他者のなす行いや業績や才能に対して、それと対抗して自分を持ちだして比較しようとしているのも「我を立てんとする行い」である。とにかく「負けまい」「勝ちたい」という思いそのものが「我を立てる心」である。世間ではこれがあるから競争もし

励むともいえるが、競争社会は修羅道といわれ、それはあるべき状態ではない。勝ったから勝ったでこんどは負けはせんと不安が伴い、負ければ負けれたで悔しい(くや)思いをする。どちらも「私の心」であって、平和な心ではない。

佐々木蓮磨師はよく「仏法は負けていく道」であると云われた。これは今の世の中の

考え方とは逆である。現代のような優劣を競う社会の中で生きるのは苦であり、愛憎の止むことがない。佐々木師の『法味寸言』に『言い合いとなれば、理屈なしに負けられるが仏法者の徳』

『妻に負け、子に負け、飼いか犬にも負けられるが仏法者の徳』

『勝つよりも負けることを喜ぶが念仏者の徳』

『人に負けることは悔しいが、和合のできることは喜ばしい』

『勝つ者は仏から離れ易く、負ける者は仏に近づき易い』

『世間では「負けて勝て」というが、仏法では負けるだけですむ』

『念仏者は人に負けるのではない。仏に負けるのである』

とある。こういう寸言は人間関係のいろんな出来事の中で、内心に起こってくる（負けまい）（負けたくない）という執拗な自我の心を反省させられる。

ここで「仏に負ける」というのは大事な点で、ここから人に負けていくことがやつと可能になると思われる。南無阿弥陀仏の大悲の中においてこそ人に負けていけるのである。

これに関して、松並松五郎さんが一茶の有名な句を出されてお話し下さったことが思い出される。松並さん曰く「やせがえる 負けるな一茶 ここにあり」とあるが、私ならこうや。

「やせがえる 負けても一茶 ここにあり」と。たとえ負けても一茶（阿弥陀様）が共にいて下さり、抱いていて下さる。だから負けていくこともできるのである。あの人にも負け、この人にも負け、妻にも負け、子にも負け、友にも負け、あの先生にも負け、この先生にも負けていく。負けて負けて、阿弥陀仏の中に摂め取られて、浄土に参らせていただきたいものである。（了）

正信偈に学ぶ問答

（三十八）

帰入功德大宝海 必獲入大会衆数

（書き下し）功德の大宝海に帰入すれば、必ず大会衆の数に入ることを獲。

（現代語訳）宝の海のように広大な功德である南無阿弥陀仏の名号（の誓い）を信ずれば、かならず現世から浄土の聖者の仲間に入ることができ

A 「功德の大宝海とは」
D 「功德とはよき用きのことです、その用きが宝のように尊く、しかも無量であるのを大きな海にたとえられて功德の大宝海といわれているのです。阿弥陀仏とか浄土の功德のことであり、ここでは南無阿弥陀仏の名号のはたらきのことです」
A 「はかりなき宝のような功德とは具体的にはどういう用きですか」

D 「阿弥陀仏とか浄土の素晴らしい功德はいろいろに限定して説かれています。たとえば智慧と慈悲といのちの無量な用きとか、あるいは清浄真実とも、あるいは常・楽・我・浄の徳ともいわれられています」

A 「常・楽・我・浄とは」
D 「常は常住のことです。いつでもどこでも常にましますという、いわば無量無辺の寿命といえましょう。楽とは安楽、安らかということ。〈我〉とはここでは自由自在ということ。束縛がないということ。浄とは浄らか、清浄ということ。そういう徳が仏や浄土は無量無辺であると説かれています」

A 「南無阿弥陀仏の名号にはこういう優れた無量の功德があるということですね」
D 「ええそうです」
A 「南無阿弥陀仏の救いと無量の功德の関係はどう受けとればいいですか」

D 「私たちはそういう功德がないから苦悩し、また邪悪にそまっているのです。常樂我浄という点から言うと、私たちのいのちは常住（常）ではなくて死ぬいのちであり、安楽（楽）ではなくて憂苦しめており、自由（我）ではなくてさまざまなものに束縛されており、浄らかではなくて濁悪（煩惱）にまみれています。そういう状態の私たちに常樂我浄の功德を与えて仏になさしめて下さるのが阿弥陀仏の救済であります」

A 「では南無阿弥陀仏に帰入するというのは」

D 「阿弥陀仏は南無阿弥陀仏の言葉（仰せ）となつて私たちに喚びかけて下さっているのです。その仰せに順うことが帰入ということですよ」

A 「その仰せとは」

D 「死に囲まれていながら、死をどうすることもできず、煩惱にまみれていながらその煩惱をなくすることもできず、空しく流転するしかない私たちに〈汝を引受け、必ず仏にするから、まかせよ〉と喚びかけたもう阿弥陀仏の大悲の誓いの言葉です」
A 「私たちは阿弥陀仏から、

いつも今喚ばれている存在なのですね」

D 「ええ、そうなんです。これは本当に大事のなかの大事なことで、驚嘆すべき慈悲のなかに私たちは居るのです。ちようど太陽は、私たちが太陽と知る前から私たちを照らして下さっているように、阿弥陀仏のお慈悲はすでに私の心に働きつめに働いて下さり、しかも南無阿弥陀仏と喚びかけて、私たちを功德の大宝海に帰入させようとして下さっているのです」

A 「帰入させようとはたらいて下さるのですね」
D 「ええ、南無阿弥陀仏の南無とは帰命ということ、帰命は〈帰せよの命〉、〈阿弥陀仏に帰せよ〉の阿弥陀仏からの命令、いわゆる仰せです。帰せよの帰とは、聖人によれば〈よりかかる〉（よりのたのむ）という意味だといわれています。ですから南無とは、よりかかれ、よりのたのめという命令のことで、南無阿弥陀仏とは私たちに〈我が阿弥陀よりかかれ、よりのたのめ〉という意味です。〈汝をありべのままで助けるからどうか私に遠慮なくよりかかってくれよ、お前を助ける親だから〉

とのやるせなきみ言葉です」

A 「南無阿弥陀仏は本当に有難い言葉ですね。お念仏申し、お念仏を聞いているとはこの大悲の仰せを聞いていることになるのですね。では南無阿弥陀仏に帰入すれば、どうなるのですか」

D 「南無阿弥陀仏に帰入し終われば、阿弥陀仏と一つにならんとお聞きしています。先ほど阿弥陀仏は常楽我浄の大功德と申しましたが、そういう点から言うと常楽我浄の功德をいただいて仏にならしていただくといえましょう」

A 「帰入し終わる時は何時ですか」

D 「この宿業の身が終わる時、いわゆるこの世の臨終の時です」

A 「では、南無阿弥陀仏の大功德をいただいたものはこの世のいのちが終わる時まではどういう利益があるのですか」

D 「阿弥陀仏に帰入して常楽我浄の功德にあえば、その功德がほのかに現実生活の上に現れてまいります」

A 「たとえばどのように現れてくるのですか」

D 「一人一人の宿業は違いま

すから、仏の功德が信心の人に現れるにしても、濃淡とか色合いに違いがあります。ですから一概にはいえませんが、常・楽・我・浄の徳に触れるとそれぞれの功德の香があたえられましょう」

A 「常の功德はどうですか」

D 「常とは常にあつて壊れも消えもしない常住の徳ですが、南無阿弥陀仏をいただく徳が与えられます。いわゆる聖人の申される長生不死の恵みです。もはや私は空しく亡びない。阿弥陀仏の寿命に摂め取られて永遠に生きるという、そういう希望に満ちた未来を現在の私たちに与えて下さいます」

A 「では〈楽〉の功德は」

D 「阿弥陀様に離れない身になれば大悲心に慰められて人生活に安らぎが与えられます。また例えば、〈あれも私の責任〉〈これも私の責任〉と重荷を負って苦しんでいたのが阿弥陀仏が私の全責任を引き受けて下さり、私は私のできることをさせていただくという無理のない生活になります」

A 「では我（自由）の功德は」

D 「私の身体と世の中の環境は変転極まりなく、身体においては老病死、環境としての世間は動乱がやまないですが、阿弥陀仏が私の主になつて下さいますから、環境や身体が思い通りにならなくても、思い通りにする必要はなくなり、与えられた縁に順つて生きるようになりましょう。ですから〈ああなつたら困る〉〈こうなつたら困る〉というように自分を縛ることが少なくなります。大体私たちの苦しみは多くは〈自分の思い通りにしたい〉という自我が中心になります。そうすると思い通りにならないことが起こると、それが私を束縛して自由を奪われることになり

ます。我が身に起こつて来た縁に順つて善処するのが念仏生活ですから、〈風ふけば倒る〉で、外から吹いてくる風に随順して善処していくという柔らかな生き方になりましょう」

A 「では浄の功德は」

D 「浄とは清浄で清らかな徳のことです。そんな心は私たちは持ち合わせていませんが、阿弥陀様の清らかな慈悲心に触れますと、我が心に満足が与えられます。そうする

と生活に不足がなくなつてきますから、貪ることが少なくなる

とか、人を怨んだり憎んだりすることが減つていきましよう。こうして欲とか怒りにふりまわされることが少しずつ少ずつ削られていくのです」

A 「常楽我浄の徳にふれると、私たちの生活にもその徳が少しずつ現れて下さるので

ね」

D 「ええそうです」

A 「では次に南無阿弥陀仏に帰入すれば〈必ず大会衆の数に入ることを獲る〉といわれて

いますが、大会衆とは」

悪人であっても、仏になることが決定している人として、

将来に得る結果から浄土の菩薩の仲間入りをした人とされるのです。また信心をいただいた人は身は凡夫でありながら仏の心が分かつた人であると、阿弥陀仏やお釈迦様がほめて下さるといふ意味でいわれるのでありましょう。これは私たち凡夫の側からいうのではなく、ここではインドの天親菩薩が〈大会衆という菩薩の一員に入った方である〉と讃えて下さるので

す」

A 「自分が偉くなつたから大会衆の仲間だと、私たちがいうのではないのですか」

D 「そうなんです。煩惱具足の悪凡夫である私たちが〈私は浄土の菩薩の一員だ〉と主張するのはもちろんありません。いただいた信心は如来様からたまわつたこの上なき尊い仏のお心のゆえに、それをいただいた人は浄土の菩薩方の仲間なのだよ、とかたじけなくも天親菩薩は讃えて下さるので

信心夜話

『一蓮院談合録より』(1)

(太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カッコ内は私の所感)

如来様の助けてくださると云うことだけさえ聞こえれば、もうそれでよいのじゃあ。あともないし、さきもないし、それだけじゃ。

*

(一億円の借金を抱え、毎日借金取りに悩まされ、将来の見通しは立たず、行き場を失っているAさんがいた。ところがその人をかわいそうだと思ひ、何とか助けたという親切なBさんがいて、毎日残業までして働いてお金を貯め、それでもってAさんの借金を全部返済して、Aさんの処に行き、Aさんに返済完了した領収書を見せて、「貴方の借金は返済した、これで安心してくれよ」という。そしてさらに数千万のお金をAさんに渡して、これを使ってくれよという。

南無阿弥陀仏のお徳をごくごく卑近なたとえでいうとこのようになるのである。私たちにあるのは憂苦と悪業の負債の罪ばかり、それをかわいそうだと阿弥陀様が法蔵菩薩になつて私たち一人一人に代わつて長い間働いて下さり、私の罪悪深重の罪の負債を全部支払つて下さつた。その証拠を南無阿弥陀仏と私たちに聞かせて示して下さい。南無阿弥陀仏は

それゆえ、(助からぬ汝を引き受けた)(必ず助ける)の仰せであり、私の助かる証拠。そして南無阿弥陀仏はさまざまな福德

を与えて下さる。こうして南無阿弥陀仏は(汝は助かるぞ、助けるぞ)の仰せであり、この仰せが聞こえたら、あとは浄土行きの阿弥陀仏の電車に乗せられて、窓からのさまざまな人生の苦楽の景色を楽しみ味わう。仰せが聞こえることが阿弥陀仏の電車に乗せたもうと知ること。浄土行きの車に乗るか乗らないか、それはお助け下さる仰せが聞こえるか聞こえないかであつて、他にあとにもさきにも決定的に大事なことはなにもない。あとは阿弥陀仏と共に生きるばかり。どんなに落ち込んだ人生も、絶望的な人生も、破綻した人生も、嘆く必要はない。今ここで、阿弥陀仏に私が受けとられるばかりで、マイナスの人生はプラスの人生に逆転する。たとえ死にかけているような人でも、(汝をそのままなりで浄土へ連れていく)の言葉を聞けばかりで浄土に帰入せしめられる。ただ、賢さを捨てよ)

われは鬼 念仏は弥陀の あたえもの
ああと云うより ことの葉もなし

(我が根性は我執我愛の塊で、我が身と我が家族の幸せのためにはエネルギーの大半は使うが他者の幸せはほつたらかし。まことに我愛、自己愛の塊である。それなのに我は善き者、彼は悪しき者と

他者を責めたり裁いたりケチを付けている。そして如来様のかけてくださる御恩には心が向かず、娑婆の小さな損得には極めてめざとい。仏法に背を向けどおしの、どうにもこうにも反仏法の助からぬ者である。その助からぬ者の口に不思議にもナムアマミダブツと称え出て下さる。

(この者をほつておけぬ、助けずにはおかぬ)との如来様のおんなさけのありだげが念仏として与えられている。こんな者によりそい、喚びづめに喚んで、(汝を助ける親がここに居るぞ)と現れて下さる。ほんにまあ、ああと云うより言葉がない)

ある人の問いに、私は信じたと言うものもなし、たのみたと云うものもございませんで御聞かせ下され。師の仰せに、そのまんまで助けてやると仰せられるぞや。

又、有難くと人様はお喜びなされますに、私は喜べないものでござります。お聞かせなされて下されませ。師の仰せに、有難や有難やとお喜びのお方も阿弥陀様でなくてはいいかんのに、ないものはな阿弥陀様でなければならんわえ。

(信心の座談をすると、必ず(私はまだ信ぜられません)(疑いがなかなか晴れません)(いつまでももうろうろしてどうもはつきりしません)(喜ばません)(阿弥陀がたのめません)などとよくいわれる。これはみな自分の心への執心、自力の計らいである。自分の心を買いかぶつているからである。自分の心をどれほど深刻

に問題にしても、我が心は問題にするほどの値打ちもない代物。この心をどうするかは阿弥陀様がすでに問題にし御思案下さつて、私の心はどんな心も往生の種にはならない煩惱妄念ばかりと見抜ききられた。そして私の心は阿弥陀仏がこれを全面的に引き受けて下さつて、私には(ただ称えるばかりでよい)とお念仏を与えて下さる。今さら我が心を相手にする要はなく、ただただ(そのままで助ける)と仰せ下さる阿弥陀様の大慈悲ばかりをあおぐ)

(了)

平成24年度御年忌年回表

1	周忌	平成23年	亡
3	回忌	平成22年	亡
7	回忌	平成18年	亡
13	回忌	平成12年	亡
17	回忌	平成8年	亡
23	回忌	平成2年	亡
27	回忌	昭和61年	亡
33	回忌	昭和55年	亡
50	回忌	昭和38年	亡

(23回忌と27回忌をせずには25回忌に
いとなむ数え方もあります。また50回忌
以後は50年ごとになります)

《真宗入門講座》

(お勤めのおけいこと法話)

毎月十八日(午後六時半始)

担当 (副住職) 土井尚存